

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	台東区今戸 2-26-12
園名	待乳保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音、楽器 …日本の踊り「エイサー、和太鼓」前半

<テーマの設定理由>

外部講師から日本の伝統的な踊りを学びながら、豊かな感性を育む活動を実施するため。

2. 活動スケジュール

年 8 回実施。
運動会で 4 歳児と 5 歳児がエイサー、5 歳児は和太鼓も披露する。
運動会後からは 5 歳児が 3 歳児クラスに引き継ぎ、次年度に向け取り組みを開始する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

パーラークー、和太鼓、衣装

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

講師にエイサーや太鼓を直接指導してもらうことで、子どもたちの運動能力の向上をはかり、表現力や想像力を養う。
和楽器や日本の伝統文化に触れ、豊かな感性を育て、達成感を味わう。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

例年運動会で日本の踊りと和太鼓演奏をしているため、活動にも期待をもち参加している。ここ数年は南中ソーランを教えていただいていたため、今年度、新しくエイサーの踊りを教えてもらったことに喜びが見られた。初回の指導では、高難度の動きに難しさを感じる姿もあったが、「今日できるようにならなくて良い」という講師の言葉に安心して、動作を模倣する姿があった。練習を重ねていくと、パーラークーを鳴らすことと、踊りの間の取り方を同時にすることに苦戦する子や、できないことでパーラークーの無駄打ちも増えていった。

和太鼓は年長のみの取り組みということで特に期待が高かった。左右のばちを使って鳴らすことに苦戦しつつも、太鼓の音の響きを喜んでいた。



5. 振り返り <振り返りによって得た先生の気づき>

始めたばかりの頃は、講師の動きを真似ることをそれぞれが楽しんでいましたが、練習回数を重ねていくと、振り付けとパーラークーを叩く動作を同時にすることや、踊りの間の取り方に苦戦する姿が見られるようになった。同時に、パーラークーの無駄打ちも増え、講師から声をかけられることもあった為、子ども達と一緒に段ボールで練習用のパーラークーをつくり、踊りの振り付けを先に覚えて自信をもてるように進めていった。一つの目標を達成すると各々が意欲的に集中できるようになっていき、自然とパーラークーの無駄打ちが減り、楽器と踊りを合わせることができるようになった。また、各々が他者の音に合わせようとする様子も見受けられるようになり、音を合わせる気持ちよさを味わえるようになっていった。4歳児は、楽器と踊りを合わせることが難しい様子もあり、講師に5歳児とは別に簡単な振り付けにしてもらう。課題を見つけて、対応することで子ども達の意欲を取り戻すことができて良かった。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	台東区今戸 2-26-12
園名	待乳保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音、楽器 …日本の踊り「エイサー、和太鼓」後半

<テーマの設定理由>

外部講師から日本の伝統的な踊りを学びながら、豊かな感性を育む活動を実施するため。

2. 活動スケジュール

年 8 回実施。
運動会で 4 歳児と 5 歳児がエイサー、5 歳児は和太鼓も披露する。
運動会後からは 5 歳児が 3 歳児クラスに引き継ぎ、次年度に向け取り組みを開始する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

パーラークー、和太鼓、衣装

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

講師にエイサーや太鼓を直接指導してもらうことで、子どもたちの運動能力の向上をはかり、表現力や想像力を養う。
和楽器や日本の伝統文化に触れ、豊かな感性を育て、達成感を味わう。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

初めてのエイサーの取り組みに初回は、緊張感や期待をもって講師の指導を真似て取り組む姿が見られたが、練習を重ねるごとに、楽器と踊りの同時進行の難しさなど課題を抱える子も見られるようになり、徐々にパーラークーの無駄打ちも増え始めた。そのため、練習用のパーラークーをつくり、振り付けを覚えることと、楽器を鳴らすことを分けて取り組むようにしていった。振り付けを覚えると自信をもって取り組めるようになり、パーラークーと合わせて自然とできるようになっていった。運動会での披露にむけて継続して取り組むことへの見通しや目標をもつ姿が見られた。和太鼓は、年長のみの取り組みということで初めから意欲的に取り組み、遊びの中でも、リズムを打つ姿が見られ、回を重ねるごとに上達していった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

経験を重ねる中で動きを覚え、向上心をもって参加する姿が見られるようになっていった。運動会が近づくにつれ、保護者の方に見てもらいたいという気持ちが大きくなり、意欲的に取り組む姿が見られていった。当日は大きな拍手をもらい、更なる意欲や自信に繋がっていった。心地よいリズムや掛け声、楽器の響きに直接触れ、豊かな感性や表現力を育むことができていた。

音楽に合わせて講師に褒められる子がいると、自分も褒められたいという気持ちが芽生え、より意識して取り組む姿が見られた。運動会で披露したことで、クラスで協力し一つの目標を達成することができ、喜びを共有することができた。そして、保護者から色々な感想を聞き、嬉しい気持ちになり達成感や自信にも繋がっていった。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	台東区今戸 2 - 2 6 - 1 2
園名	待乳保育園

1. 活動のテーマ

＜テーマ＞

泥遊び

＜テーマの設定理由＞

・広い園庭を使用し、砂や土、水などの自然の素材に触れることで、五感を刺激し、手先などの感覚を育む。

2. 活動スケジュール

・月 1 回程度

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・黒土
- ・雨どい
- ・砂場用玩具
- ・ゴミ袋

4. 探究活動の実践

＜活動の内容＞

- ・山を作ってトンネルを掘り、水を流して遊ぶ。
- ・水たまりを池に見立てたり、水路を作り水を流したりする。
- ・雨どいを繋げて水が流れる面白さを感じる。
- ・泥団子を作って遊ぶ。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

1、2 歳児クラス：泥を手ですくい、「つめたい」「きもちいい」等と感触を言葉にして伝えあう姿がある。泥に触れることに抵抗を見せる子もいたが、シャベル等の物を介しながら触れて遊ぶうちに泥に親しみ遊ぶようになっていった。また、友達や保育士等が泥に触れて遊ぶ姿を見ることで、徐々に抵抗感も薄れていった。慣れてくると「裸足で遊びたい」と話す子が増え、手や足で泥に触れ、水溜りにジャンプしたり、水路を裸足で歩いたりと大胆に遊ぶようになる。

遊びの中では、大きな池を作ろうと水を流すが砂に水が吸い込まれ、なかなか水が溜まらない様子

があった。大人がビニールを敷き、環境を作ったことで水が溜まり、水路と水路を繋げようとシャベルで砂を掘るというように遊びが広がっていった。

幼児クラス：泥遊びに使いたい玩具を取り出し、水をためるための穴を友達と一緒に掘ったりその水を流すための水路を掘り進めたりし、水を流し入れていく。しばらくは水が砂に浸み込んでいきたまらないが、たまり始めると「池ができてきた」「こっちに流れていくかな」等と喜びながら友達同士でしゃべる姿がある。車の玩具を出すと、泥の上を走らせたり荷台に泥を入れて運んでいったりし、工事現場をイメージして遊びを進めるようになる。「こっちに泥をためよう」「ぼくが車で運ぶよ」等と話しながら役割分担をしたり、さらに泥を手で混ぜていき水っぽさを減らして感触を楽しんだりする様子も見られる。

泥だんご用に黒土を用意したところ、砂場の砂と異なる感触であることや割れにくい性質であることに気づく。絵本を通して「光る泥団子」というものがあることを知ると、年長児を中心にチャレンジする姿があった。しかし簡単には出来ない難しさから集中力が持続せず、途中で諦めてしまう子も多かった。時期をあけて保育士が見本となる光る泥団子を作ってみたことで、憧れの気持ちから再度泥団子作りが始まる。丁寧に磨くことで光る泥団子になっていく不思議さや、次の日も継続して遊ぶことができる期待感から、夢中になって遊ぶ姿があった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

普段から砂場遊びを行い、水と砂を混ぜ合わせて遊ぶことを楽しんでいた。保育士も子供の目線に立ち一緒に泥遊びを楽しみながら、状況に応じてさりげなく環境構成を行うことで、子供の遊びがより発展していくように感じた。雨どいやアイスクリームの玩具等新たな教材を準備したことで子供のイメージが広がっていき遊びに充実感が出たように思う。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	台東区今戸2-26-12
園名	待乳保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

絵本の世界 …おおかみと七ひきのこやぎ

<テーマの設定理由>

どの年齢でもとても親しみやすい題材で、絵本を通し、豊かな感性をはぐくみ遊びを広げていくため。

2. 活動スケジュール

1 1月下旬 表現遊びをきっかけに各クラス絵本や、パネルシアター等を取り入れていく。

2月 人形劇「おおかみと七ひきのこやぎ」を見る。

2月 人形劇をみて遊びの中で「おおかみと七ひきのこやぎ」の物語のように役割を分けながら劇ごっこのような遊びができるよう環境を作っていく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・年齢にあった絵本や紙芝居を購入していく。
- ・パネルシアターやペープサートも使用していく。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・絵本や紙芝居を通して「おおかみと七ひきのこやぎ」のストーリーに親しみをもてるようにしていく。
- ・乳児、幼児クラス共通で、2月25日に人形劇の「おおかみと七ひきのこやぎ」を見る。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

<乳児> 0歳児、1歳児クラスでは、人形劇を見る場面で、体を揺らしたり、1歳児クラスの数名は指差ししたりしながらじっとりと見ることを楽しむ姿があった。2歳児クラスでは11月下旬から、「おおかみとしちひきのこやぎ」の紙芝居をみ始めると、おおかみがこやぎを追いかける場面で一緒に「わー」と声に出して反応する姿があった。人形劇では、「こわい」とおびえる姿もあったが、「たべられちゃった」「お母さんに会えてたね」と楽しむ姿もあった。人形劇後は、園庭遊びで行っている追いかっこで「おおかみ」になりきって追いかける遊びに広げる姿もあった。

<幼児クラス>

絵本や人形劇を通して、ごっこ遊びやかくれんぼをした際に、題材をイメージしながら遊ぶ姿が見られた。室内遊びでは段ボールの仕切りを使用して家に見立て、隠れてやり取りを楽しんだり、保育士が人形劇の道具を真似て折り紙で制作した物を見せると、子供たちで様々な動物を作って遊びに取り入れたりしていた。戸外では追いかける側がおおかみ役となり、捕まったら食べられてしまうという共通の意識を自然ともちながら逃げ、関わりを楽しんでいる姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

人形劇中は、年齢によって色々な反応が見られていたが、「おおかみと七ひきのこやぎ」の物語をじっくりと見る姿があった。普段見ている絵本や紙芝居と違いより集中している姿に視聴覚教材の違いでの反応の差を実感することができた。人形劇後は、2歳児クラス以上の子ども達がごっこ遊びに広げていく姿が見られたことから、物語を見てどのように感じて遊びに持っていくか、子ども達がどのような視点で見ていたかも学ぶことができた。